

教科・科目	国語・国語表現
タイトル	ルーブリックを用いた小論文指導における相互添削の試み
目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 国語表現では、生徒が書いた小論文は、教員が添削してきた。今回初めて添削する側にまわることで、どのような文章を書いたら得点につながるのかを意識させる。</li> <li>■ 相互添削とルーブリック評価を組み合わせることで、相互評価のデメリットである「評価のブレ」を克服し、生徒間においても、明確かつ公正な評価を行う。</li> </ul>
期間	全3時間中の第3時
対象	3年生国語表現選択者
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 全3時間で「統計資料型小論文」の学習を行った。そのうち第3時の「相互添削」が今回の実践である。</li> <li>■ 第1時...「統計資料型小論文」という形式について知り、統計資料を読み取る練習を行う。</li> <li>■ 第2時...統計資料型小論文を書く。</li> <li>■ 第3時...書いた小論文の相互評価を行う。 <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 氏名を隠した小論文のコピーに、「相互評価シート」をホチキスで添付する。</li> <li>○ 複数の人間(最大6人)が1人の作品を評価できる。</li> <li>○ 評価者は記名する。</li> <li>○ 添削の際は、全員にルーブリックを配布し、評価シートのA・B・CとルーブリックのA・B・Cを対応させて評価するよう指示した。(本来、ルーブリック表は小論文を書く前に配るのが用途として適切であろう。しかし、普段通り書いた上での、相互添削における気付きを際立たせるために、今回はあえて添削の際に提示した。)</li> <li>○ コメント欄には、必ず、いい点と改善点の両方を書くように指示した。</li> <li>○ その後、教員が評価をして、相互評価シートをつけて、執筆した本人に返却している。</li> </ul> </li> </ul>
一人ひとりの学びを深める要素	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 全員が複数人の添削をし、また添削される形式である。</li> <li>■ ルーブリックを用いて添削してみることで、評価基準＝点数に繋がる要素を認識できる。今後の小論文を書く際の技術力向上が期待できる。</li> </ul>
教材等	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 《教材》 <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 第一学習社「特化型小論文チャレンジノート」</li> <li>○ 自主プリント</li> </ul> </li> <li>■ 《参考文献》</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 近藤裕子「多因子からなる小論文評価ルーブリック作成の試み」『山梨学院生涯学習センター紀要』第23号,79-91(2019)</li> <li>○ 見尾久美恵「小論文指導における定量的成績評価と課題に対する学生の評価との間の相関分析」『川崎医療短期大学紀要』36号:1~8(2016)</li> </ul>
<p>成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 「相互添削」について、生徒にアンケートを実施した。 <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 質問「他の人の小論文を評価して(添削する側を体験して)今後自分が小論文を書くときに活かそうと思ったことがあったか」 <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 96.3%が「あった」と解答した。</li> <li>➢ 具体的にどう活かせるかについて、「他人の文を見ることで自分の文が客観的にみられるようになった」や「考えや指摘を明確にすることで、読みやすさが格段に上がるなど感じたので、あまりこねくり回しすぎず、シンプルにまとめることを意識すべきだと思った」などの意見があった。</li> </ul> </li> <li>○ 質問「他の人に評価されることで、教員に評価されるときと異なる気付きはあったか」 <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 85.2%が「あった」と解答した。</li> <li>➢ 具体的には「生徒は先生方と違い、採点する機会が少ないため、いざ採点すると、自分のとても細かい表現のミスなどを指摘してくれたから」「いつもより細かった」など、添削の細かさや視点の違いに対する指摘が目立った。</li> </ul> </li> <li>○ 質問「相互添削をまたしてみたいか」 <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 92.6%が「また相互添削をしてみたい」と解答した。</li> </ul> </li> </ul> </li> <li>■ このように、「相互評価」については、肯定的評価が多かった。39名の添削を一人の教員がするには限界がある。普段の添削のコメントも、多くて5行程度しか書けていないのが実情だ。相互添削においてきめ細やかな指導が可能となるのは、大きなメリットだ。一方で、否定的な意見としては、「同世代の意見は受け入れられないから、教員に添削されたい」というものだった。否定的意見はあるものの、「添削者の立場に立つ」ことで、「評価の高い文章がどのような文章か」を客観視するというねらいは、おおむね達成できているように思う。</li> <li>■ ルーブリックを用いたことの目的は生徒間、生徒教員間の評価のブレを少なくすることであった。結果、相互添削後の教員による添削とそれほど乖離した点数は見られなかったと感じた。本来はこれについてもデータを取るべきであった。今後の課題としたい。ルーブリックという評価基準を生徒に持たせたことで、生徒たちは「何が評価されているか」を、採点者と同様の視点から見ることでできたと考える。アンケートにおいて「文章への批判の視点が増えた」という感想を見ることができたのも、評価基準を明示したからだと思う。</li> </ul>
<p>課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 上述のアンケートにおいて、ルーブリック表について自由記述の意見を求めた。その中の否定的意見を挙げたい。 <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「一部だけ書き方が良くないことで大きく減点になってしまうと全体はいいのに点数が高くなってしまった。」</li> <li>○ 「点数はつけづらかったので、文章だけが良いです。」</li> </ul> </li> <li>■ 一部の書き方が悪いと大幅減点になってしまうことも、小論文ではあるだろう。それ自体は問題ないのだが、なるべく簡単に評価できるルーブリック表を目指</li> </ul>

	<p>したがために、これを基準にすると、ほとんどの生徒が同じような点数になってしまったのも事実だ。これが「つけづらかった」という感想が示すものなのかもしれない。</p>
<p>今後の展望</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 課題を踏まえ、より生徒の実態を把握したうえで、評価基準は再考すべきだと感じた。</li> <li>■ また、アンケートの中で、「(添削する際に)字で書いた人がわかってしまうのが残念」という意見もあった。今後、一人一端末(BYAD)が導入される中で、小論文をドキュメントで提出するようになれば、より匿名性が保たれた状態で、相互添削が可能になるだろう。添削とその点数化も、GSuiteの機能を使えば、より簡単でわかりやすくなるかもしれない。</li> <li>■ ただし、入試が手書きで行われている以上、手書きでの練習も必要になるというジレンマは抱えることになる。</li> <li>■ 国語は、授業でのICTの活用(特にキーボード付きの端末の活用)が難しいように感じていた。しかし、こうした小論文指導等においては、使い方次第で学習効果が上がることが期待できるだろう。</li> </ul>